

武蔵野日曜聖書講筈

十字架のキリスト

——マタイ伝第27章33～54節——

1991年3月17日

小池辰雄

十字架 十字架につけんとて曳きゆく なんぞ我を見棄て給いし 即身即神 罪びとの首 彼らを赦し給え 今日私と一緒にパラダイス

【マタイ27】

31……十字架につけんとて曳きゆく。

32その出づる時、シモンというクレネ人にあいしかば、強いて之にイエスの十字架をおわしむ。33斯てゴルゴタという処、即ち髑髏の地にいたり、34苦味を混ぜたる葡萄酒を飲ませんとしたるに、嘗めて、飲まんとし給わず。35彼らイエスを十字架につけてのち、籤をひきて其の衣をわかち、36且そこに坐して、イエスを守る。37その首の上に『これはユダヤ人の王イエスなり』と記した罪標を置きたり。38ここにイエスとともに二人の強盗、十字架につけられ、一人はその右に、一人はその左におかる。39往來の者どもイエスを譏り、首を振りていう、40『宮を毀ちて三日のうちに建つる者よ、もし神の子ならば己を救え、十字架より下りよ』41祭司長らも、また同じく学者・長老らとともに、嘲弄して言う、42『人を救いて己を救うこと能わず。彼はイサエルの王なり、いま十字架より下りよかし、さらば我ら彼を信せん。43彼は神に依り頼めり、神かれを愛しまば今すくい給うべし「我は神の子なり」と云えり』44ともに十字架につけられたる強盗どもも、同じ事をもてイエスを罵れり。

45昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、二時に及ぶ。46二時ごろイエス大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言ひ給う。わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いしとの意なり。47そこに立つ者のうち或る人々これを聞きて『彼はエリヤを呼ぶなり』と言う。48直ちにその中の一人はしりゆきて海綿をとり、酸き葡萄酒を含ませ、葦につけてイエスに飲ましむ。49その他の者ども言う『まで、エリヤ来りて彼を救うや否や、我ら之を見ん』50イエス再び大声に呼わりて息絶えたもう。51視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地震い、磐さけ、52墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍體



おおく活きかえり、⁵³イエスの復活ののち墓をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現れたり。⁵⁴百卒長および之と共にイエスを守りいたる者ども、地震とその有りし事とを見て、甚く懼れ『実に彼は神の子なりき』と言えり。

●十字架

『著作集第十卷『聖書は大ドラマである』の10月30日の項に「十字架」と題したところがあるので、読みます。

「20祭司長、長老ら、群衆にバラバの赦されんことを請わしめ、イエスを亡ぼさんことを勧む。²¹総督(ピラト)答えて彼らに言う、『二人の中いづれを我が赦さん事を願うか』。彼らいう『バラバ』。²²ピラト言う『さらばキリスト(メシヤ)と称うるイエスを我らいかにすべきか』。皆いう『十字架につくべし』」
(マタイ27・20～22)

「民の長老たち、祭司たち、律法学者ども、パリサイ派、サドカイ派、ローマの官憲・兵卒などに敵視され、弟子どもに知らん顔され、弟子の長ヘテロにすら否まれ、弟子の鬼才ユダに裏切られ、雷同的な民衆に棄てられ、政治犯、瀆神者とときめつけられ、囚人に上まわる極悪人とされ、悪口雑言を浴びせられ、唾きせられ、鞭打たれ、衣をはぎとられ、緋色の上衣を着せられ、荊の冠をかぶせられ、「ユダヤ人の王、安かれ！」と嘲弄され、再び上衣を剥かれ、血の雫と汗が顔に流れ、傷だらけの軀にされ、侮辱の極みの中を七十キロもある十字架を負わされて、エルサレムの城門外北西のゴルゴタ(髑髏)の丘へと、ヴィア・ドロロサ「苦難の道」をよろめき辿らしめられゆくイエス！

人間の、人類の、世界歴史の過去、現在、将来の、どつにもならぬ不信の、忘恩の、反逆の、悪魔的、地獄的、鬭争的、虚偽と混沌と矛盾と攪乱の実相の逆徴が、イエスの、キリストの、十字架を負い給うこの姿である。十字架されたイエスの宝血がゴルゴタの土に泌み入る。誰か知らん「人類の罪を負う神の羔」なる文字がキリストの血で大地に書かれていたのだ！」

●十字架につけんとて曳きゆく

³¹……十字架につけんとて曳きゆく。

³²その出づる時、シモンというクレネ人にあいしかば、強いて之にイエスの十字架をおわしむ。

「クレネ」というのは、北アフリカにあるギリシアの植民地の町の名です。海拔が548メートル、海岸から15、16キロあるところ。ここには多くのユダヤ人も居たそうです。

そういうわけで、ゴルゴタに向かつて、エルサレムの西北、城門の外へ連れていかれた。



「²⁷民の大いなる群と嘆き悲しめる女たちの群と之に従う。²⁸イエス振り反りて女たちに言い給う『エルサレムの娘よ、わが為に泣くな、ただ己がため、己が子のために泣け。²⁹視よ「石婦・児産まぬ腹・飲まぬ乳は幸福なり」と言う日きたらん。³⁰その時ひとびと「山に向かいて我らの上に倒れよ、岡に向かいて我らを掩え」と言い出でん。³¹もし青樹に斯く為さば、枯樹は如何にせられん』」。

³²また他に二人の悪人をも、死罪に行わんとてイエスと共に曳きゆく。

³³髑髏されこうべという処に到りて、イエスを十字架につけ、……」（ルカ23・27〜33）

「²²イエスをゴルゴタ、^と積けば髑髏されこうべという処に連れ往けり。²³斯かくて没薬もつやくを混ぜたる葡萄酒を与えたれど、受け給わず。」（マルコ15・22〜23）

「没薬を混ぜた葡萄酒」というのは、一種の麻酔的な苦みをもった液で、多少、苦しみを和らげるという気持もあったのかは知りませんが、イエスはそれを受けとらなかつた。

キリストが付けられた十字架の高さはそう高くない。「槍で突いて水が迸る」なんていう、その角度からいうと。ちょうど、マグダラのマリアがキリストの足にしがみつくと、ですから、そう高くないわけです。

話は少し余談になるけれども、マグダラのマリアがキリストの足にしがみついた姿を、キリストの身体に裸でしがみついた様に描いたのが、ロダンの彫刻です。ロダンはマグダラのマリアの気持を非常に露骨に表現したわけです。そういう意味では、彼女はキリストに一途いちずに縋すがつていった。墓場にも最初に出掛けて行った。復活のキリストにも最初にくわした。これがマグダラのマリアという、七つの悪鬼を追い出された女性です。

³⁷その首しうべの上に『これはユダヤ人の王イエスなり』と記しるした罪標ずてふだを置きたり。

「イエズス・ナザレーヌス・レックス・ユダオーラム」

とラテン語ではそう書いてある。

「ユダヤ人の王、ナザレ人イエス」

ヘブライ語とラテン語とギリシア語で三つ書いたらしいね。いや、二つかな、ヘブライ語とギリシア語かな。

³⁸ここにイエスとともに二人の強盗、十字架につけられ、一人はその右に、一人はその左におかる。³⁹往來ゆききの者どもイエスを譏そしり、首を振りていう、⁴⁰『宮を毀こぼちて三日のうちに建つる者よ、もし神の子ならば己を救え、十字架より

下りよ』⁴¹祭司長らも、また同じく学者・長老らとともに、嘲弄ちやうろうして言う、

より下りよかし、さらば我ら彼を信ぜん。⁴³彼は神に依より頼めり、神かれを愛いとくしまば今すくい給うべし「我は神の子なり」と云えり』

と勝手な嘲あざわりの言葉を並べているわけです。



●なんぞ我を見棄て給いし

「³³昼の十二時に、地のうえあまねく暗くなりて、三時に及ぶ。³⁴三時にイエス大声に『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と呼り給う。^{よはわ}

これは、マタイ伝では

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」

と、こつちの方が純粹のヘブライ語で、「エロイ、エロイ」の方は方言的な言い方です。

之を訳せば、わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし、との意なり。³⁵ 傍^{かたわ}

らに立つ者のうち或る人々、これを聞きて言う『視よ、エリヤを呼ぶなり』(マ

ルコ15・33～35)

「エロイ」「エリ」と言ったのを、「エリヤ」と間違えた。そういうように彼らは聞いた。これは、詩篇の22篇の第1節がこれなんです。そこから来ている。

「わが神わが神なんぞ我をすてたもうや……」

そして、9節には

⁹されど汝はわれを胎内よりいだし給えるものなり。わが母のふところにありしとき既になんじに依頼^{よりのたの}ましめたまえり。¹⁰我うまれいでしより汝にゆだねられたり。わが母われを生みしときより汝はわが神なり」(詩篇22・1…10)

キリストは聖霊で生まれた方ですが、マリアのおなかの中にあつたときに、

「ふところにあつた時に、もう既にあなたに依り頼ましめられていた」

のだと。この9節、10節は、いかにもキリストの生まれのことをそのまま言っているような言葉です。この「母のふところ」という字は、ヘブライ語では「胸」という字で、「乳房の中に」という気持の字なんです。もともと「乳房」という字ですから。キリストは22篇をちゃんと気持の中に持つていらつしやつたようですね。

ついでに、ちよつと注意しておくところは、

「²⁷地のはては皆おもいだしてエホバに帰り、もろもろの国の族^{やから}はみな前にふしおがむべし。²⁸国はエホバのものなればなり。エホバはもろもろの国人^{くにびと}を

すべおさめたもう」(詩篇22・27～28)

「国も土地もみな神さまのものだ」と。

「土地も神のものだから全部国有にしたらしい」

と、トルストイの『復活』の中ででてくる。トルストイがそういうことを言っている。

●即身即神

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」(マルコ15・34)

この言葉が非常に大事なことなんです。パウロが、

「義人なし一人だになし」



と言った。この「一人だに無し」で、ただ例外者はキリストだけが義人である。神の御意を完全に受けとつて、これを体現した。

真言密教では、

「即身成仏」

という。高野山へ行くと、

「空海は死んではいない、空海は即身成仏で今でも生きている」

と、はつきり言うそうだ。

「我を見し者は父を見しなり」

とは即身成仏的な即身即神だ。とにかく、あの禅宗にしろ、真言宗にしろ、彼らはみな修養して段々そういうように昇つていく。曼陀羅の話を聞いていると随分面白いが、その段階が大変だ。

ところが、イエスという人は初めからその世界に入っている人です、もう12才のキリストから。ケタが違う。成仏、成神どころじゃない。即身即神なんだ。身がそのまま神なんだ。ということは、完全に、いわゆる相対的な我というものがない、無私の世界です。だから、無者だ。本当の無者だから、即身即神なんです。成神ではない。

「我を見し者は父を見しなり」

という。

「なぜ私のことを良いというか。私は何者でもない。」

という人が「私は神だ」と言う。神と同じなんだ。この花が、

「我を見し者は太陽を見しなり」

というのと同じことだ。そういう神の相に即して人間は造られた。

我々は本来、「エーベンビルト ゴッテス」神の即身である。即像である。進化して段々サルが人間になったんじゃない。これは、魂の世界の大真理なんだ。次元の違った魂の世界の大真理を受けとらなかつたら、我々の宗教は成り立たない。次元が違う。だから、福音はずいというんです。

それから落つこちてしまったんだ。

「パラダイス・ロスト (失樂園)」

だ。ミルトンがきんぎん書いた。「パラダイス・ロスト」はアダム・イブの神話的な物語じゃない。我々の現実の事態なんです。パラダイス・ロストしたのを、

「パラダイス・リゲインド (楽園回復)」

にしてくださいだったのが、キリストだ。だから、キリストを受けとる。

「穢土即極楽」

という世界は、

「汝らのうちに神の国あり」



という、即、極楽の世界です。これが我々が、

「エン・クリスト（キリストの中）に生きている」ということです。

「もはや我れ生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生きたもうなり」（ガラテヤ2・20）

と、パウロが烈々たる魂でもって、ああやつて動いて行つたのは、完全にキリストに生きていたからです。聖霊に生きていたから。

● 罪びとの首

キリストは、

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

と言われた。この義人が棄てられたら、

「神に即して100%に生きた私を棄てたら、義が成り立たないじゃないですか。天地を貫いているところの大黒柱が倒れてしまうではないですか」

というのが、

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

というこの叫びです。この叫びがなかったら、

「彼らを赦したまえ」

だけであつたら、ダメなんです。この叫びは、キリストが詩篇22篇の第1節を叫ばれたのは、人類は棄てられているんです。全部棄てられてしまう。我々は直接に神さまに裁かれたら、全部人類は滅びです。

私は仏教の世界をけなしはしない。けなしはしないけれども、正直、キリストだけは次元が違ふんです。砂漠の宗教は日本の風土に合わない。けれども、砂漠の宗教とか何とかじゃない。キリストはユダヤ人中のユダヤ人だから、完全に超ユダヤ人なんだ。ゲエテはドイツ人で超ドイツ人だ。我々も生粋の日本人でありながら、超日本人にならなければダメです。それが本当の日本人なんです。相対でありながら、絶対を持っていなければダメです。

パウロが自分を

「罪びとの首」

と言った。内村鑑三も自分を「罪びとの首」と言った。

私は第三の、「罪びとの首」だ。いいよ、それで。けれども、そこに来ているところの、この福音の事態は、全世界といえども、私は決して退かない。それだけのものが、キリストが、ちゃんと来てしまった。その世界になると、「信仰」とか何とかいうものではない。

だから、私はこの叫びが一番うれいんです。

「わが神、わが神、何ぞ我を棄てたまひし」



と。人に棄てられて神さまに拾われたかと思つたら、神さまにも棄てられてしまった。天涯孤独だよ、キリストは。本当はこんな深刻な叫びはない。

「あなただけは棄てないと思つたが、私をお棄てになさつた」

それはもう既に十字架の前に、ゲッセマネの祈りでキリストは受けとつていらっしゃるんです。

「お前は十字架を負え。イザヤ書53章をお前が全うしろ」

と。けれども、キリストは復活のことをちゃんともうその前に信じておられた。

「三日目に甦るぞ」

と。十字架と復活は離すことができない。

「この義をお前たちにそつくり無条件に与える」

というのだから、これが本当の愛なんです。

●彼らを赦し給え

「彼らを許せ」

という言葉がその後に、ルカ伝に出ている。

「斯くてイエス言い給う『父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればな

り』」(ルカ22・34)

「彼らは私にとんでもない仕打ちをした。赦してやってください」

と。「何ぞ棄て給いし」という、この土台において赦しが来るんです。「何ぞ棄て給いし」というのは縦の叫び。今度は、「彼らを赦せ」というのは横の叫びです。十字架になっている。

「彼らを赦してやってください」

これが愛なんです。義が土台になっている愛なんです。「義と愛」は十字架ではキリストにおいて一つです。

「神の痛み」なんて、北森氏の「痛みの神学」がえらく評価されてるけれども、そんなのはその前段のはなし。「痛み」じゃないです、あれは本当は「呻き」という字です。エレミヤ記の34章に出てくる言葉です。

「聖霊いいがたき呻きをもつて執成し給う」

というロマ書8章26節もそうだ。

もうここになると、「呻き」を越えてしまっている。「叫び」なんです、みんな。異言の叫びをキリストがされたら、至聖所の幕が上から下まで裂けてしまった。ということ、旧約の宗教はこれでおしまいだということ。ドイツ語でいう「アウフヘーベン(棄揚)」という。それを成就して棄ててしまう。旧約聖書は、完全にキリストが預言は全部成就して、

「もう旧約はいらぬ、新約で来い。モーセの十誡じゃないぞ、律法じゃないぞ」

ということ。旧約は隠れた福音だったけれども、今度は、新約は露なる福音だ。しかし、ユダヤ人は、よつてたかつてキリストに躓いてしまった。



十字架に懸かっている人だけが、「赦せ」ということが言えるんです。他の人には「赦せ」ということが言えない。それは罪の贖いをしている人だから。

十字架の罪の贖いを受けて、我々は——過去・現在・未来の人間、小池は、相対的な小池は——全部贖われてしまって、問題はないんだ。私は問題のない人間だ。何と言われたつていいよ、問題はないんだから。問題は全部キリストの十字架が引き受けてくださった。あなた方、本当にそういうように受けとっていますか、十字架を。

「もう私は自分なんか問題にしません、そんなものを問題にして何になるか」と。そこには、烈々たる聖霊が臨んでくる。問題にしているところには聖霊は臨んで来ません。

何のためにキリストは十字架に懸かったんだ。でなければ、いきなり天界へ行つていいひとだった。

「こんな苦杯は自分は飲みたくない」

とキリストは言われたんだ、本当は。

「けれども、あなたの御意をなしてください」

と。エリヤよりもつと素晴らしくキリストは天界へ昇つてしまう人だ、そのまま。霊化してしまう。まあとにかく、大変な霊止ひとなんです。復活のところにくればまたそうだ。驚くべきことです。

イエスという方は、キリストという方は、私にはもうアルファでオメガです。その他には何も要らん。初めであり、中であり、終りである。終りとは目的ということ。大目的。

ゲートルにもダンテにもそれだけのキリストは出て来ない、あの偉大な詩に。私は必ず書きますから。バッハの「受難曲」というのはあるけれども、「受難曲」はいいけれども、なぜ「復活曲」を書かないのか。その点がちょっと惜しいね。

「彼らを赦したまえ、為すところを知らず」

と。そうやって、私たちは、私は赦された。だから、いかなる人の罪も何でも赦すことができる。赦すことができなかつたら、私には聖霊が無いといっている。人をいつまでも許さないで、

「あの野郎、こんなことをした」

なんて、いつまでも執念深く思っているのは、そんな人は本当は十字架を受けとっていない。ダメになっていくよ、そういう人は。論より証拠というんだ。キリストに赦された人は誰でも赦す。向こうが憎んでいても、向こうがこつちを棄てても、逆に

「ああ、お気の毒さま」

というわけだ。

最後は、本当に喜びの世界じゃないですか。あの苦難を通つたダンテが『喜曲(ラ・コメディア)』と言った。「デイビナ」を付けたのは、あれはボッカチオが付けた。彼は『神曲』と言



わなかった。ただ「コメディア」と言った。ベートーベンも、

「コメディア フィニタ エスト（喜劇は終わった）」

と言った。あれだけの苦しみを経てだからね。みんな本当に魂が勝利しているんです。だから、

「わが神、わが神、何ぞ我を棄て給いし」

と。これが土台だ。これは義の叫びです。

「赦してやってください」

これは愛の叫びです。私達は無条件に赦されている。無条件に赦されたから、無条件に受けとるだけのなし。何も条件はいらぬ。あなた方、魂が躍らないですか、

「こんな世界に入れられて、どうしましょうか」

と。じつとなんかしてられないんだ。

● 今日私と一緒にパラダイス

「³⁹十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』⁴⁰他の者これに答え禁めて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。』⁴¹我らは為しし事の報を受くるなれば当然なり。然れど此の人は何の不善をも為さざりき』⁴²また言う『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶えたまえ』⁴³イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』』（ルカ 23・39〜43）

イエスはこの告白をお聞きになったものだから、

「お前は今日私と一緒にパラダイスだぞ」

と仰った。こんな福音がどこにあるんですか。最後の瞬間に、地獄に落ちようと思った奴がギューツと上に上げられた。片一方の、

「お前は救え」

なんて言った奴は完全に地獄へ行ってしまった。

この二つの十字架は、人間を、人類を二つに分ける。神・キリストの前に平伏す魂は天界へ救われていくが、傲慢な奴は地獄へ落ちる。不思議なことです、この二人の会話は。正にドラマだね。「聖書は大ドラマである」というのはそういうことなんだ。

いろんなことを策略することはいかん。躓いても転んでも、魂が純心でなくてはいかん。偽り、策略、これはいかん。みんなそれはサタンだ。パウロという人は策略じやない。彼はもう一生懸命なんです。ただその一生懸命が、とんでもない間違いをした。だから、キリストはひっくり返して、福音のために、本当の一生懸命に変えてやった。

「お前は、私を迫害しているのは、とんでもない間違いだぞ」

と、ひっくり返された。パウロは自分を義しいと思っていたんだね。策略でも何でもない。



義しいと思ひ込んでいたのが大間違い。

「自己義認だ、とんでもない」

と、キリストにやつつけられた。キリストは自己義認なさらぬ。

「私は何ものでもない」

とおっしゃった。

「アブラハム、エホバを信ず。エホバ、これを彼の義となしたまへり」

という、あれだ。

「神さまのおっしゃることは分からないけれども、もうしようがない。神さまがお

っしゃるから、受けとります」

「よし、それでいいんだ」

と。これが「義とした」ということです。

「今日汝、我と偕にパラダイスなり」

と。毎日、私達はキリストと一緒にパラダイスを歩いているわけだ。どんな現実であつても、パラダイスにしてしまう。どんな現実でも、例外なしに。地獄的な現実でもパラダイスにしてしまう。

「キリストわがうちに、我れキリストのうちに」

と。どう扱われようが、どう言われようが、一向差し支えない。私はキリストと一緒になるならパラダイスだ。すごいよ、それは。何を失敗しようが、

「倒れたと思つたら、キリストの懐の中だった。やつぱりパラダイスだった」

と、こういうわけだ。それだけの現実を受けとってくださいよ、本当に。絶対に行き詰まらない。「行き詰まっている」ということは、

「キリストを本当に受けとつてない」

ということだよ。それだけのはなしです。パウロが、

「我一切の秘訣を得たり」

と、ピリピ書で言っているのはその境地なんです。キリストを持つていれば、一切の秘訣あり。どんな現実でも、大丈夫だ。

「悲しみにも、喜びにも、富めるにも、貧しきにも、人からの嘲りにあつても、ど

んな現実であろうと、私はキリストとパラダイスです」

と。「福音」と言うよりか、「楽音らくいん」と言つた方がいいかも知れない。楽しみ。楽しい音信おとずれ、

キリストの楽音という。楽園から楽音になつてしまう。

ダンテの『神曲』を見ると、「パラディソ (楽園 PARADISO)」のところは実に光

がたくさんだね。あそこはもう光の世界だ。

私は墓も何も要らぬと思つていけるけれど、もし墓を家の者が造れば、そこには「小池辰雄」なんて書かないで、



「今日、汝、我と偕にパラダイス」と、
 という文句を書いておいてもらおう。

「あなたも早くパラダイスに来なさい」

なんて、墓参りの人に。私はお墓参りなんて余り好きじゃない。私はほとんど兄貴のお墓参りなんかに行つたことがない。墓の中にいないから。お墓なんか要らないんだ。天界なんだ。どつちにしたつて、天界に往く人には、地上のそんなものはどうでもいい。

50 イエス再び大声に呼わりて息絶えたもう。51 視よ、聖所の幕、上より下まで

裂けて二つとなり、また地震い、磐さけ、52 墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍體

おおく活きかえり、53 イエスの復活ののち墓をいで、聖なる都に入りて、多

くの人に現れたり。54 百卒長および之と共にイエスを守りいたる者ども、地

震とその有りし事とを見て、甚く懼れ『実に彼は神の子なりき』と言えり。

キリストの異言的な大音声は大変なもんです。これは大音声で、言葉じゃないんだ。そうしたら、旧約聖書は要らないというわけで、至聖所の幕が切れてしまった。エライことが書いてあるね。まあ、大変な霊止です。だから、ユダヤ教徒には躓かれたわけです。

「45 聖所の幕、真中より裂けたり。46 イエス大声に呼わりて言いたもう『父よ、

わが霊を御手にゆだね』(ルカ23・45～46)」

この言葉も大声で。何といったつて、この十字架のところドラマ中のドラマです。類例のないものです。こういうところは夜中に、夜更けてから独りでもつて、じーっと黙読しながら、黙祷しながら全身をキリストの中に入れてごらん下さい。すごいことになるから。曼陀羅に胎蔵絵と金剛絵と二つあって、何故二つあるかという、これは本当は最後が融合するためだという。女性的なものと男性的な絵です。非常に優しい顔をしている仏さんと、きりつとした仏さんと二つ。キリストはその両面をお持ちなんです、男性的なものと女性的なもの。福音書を見ると、イエスには非常にやさしい言葉と、非常に烈しい言葉と二つあるでしょ。これは渾然として一つなんです。永遠に女性的なるもの、永遠に男性的なるものは、本当の永遠に人間的なるものということになる。それは、キリストが

「我を見し者は父を見しなり」

という姿。宇宙的な存在です。もう表現できない。

トルストイも最後の方はやつぱりダメだね。観念にいきすぎた。本当の人間性からずれてしまった。プーシキンというのは早く死んで惜しいことをした。あれはすごい詩人だな、本当は。ユゴーは大変な人だ。「レ・ミゼラブル」。世界の第一級のものを読むことですよ、皆さん。今は、なんだって日本は、マンガとかくだらない雑誌を読んでいるかと思うね。日本人の精神、魂はどういうことになるんだ。一番滅びに向かっているんじゃないかな。教育者がなつちやらんです。

